

# 序文

オーブリー・ヴィンセント・ビアズリーは1872年に英国に生まれた。1898年に肺結核により亡くなった。

二十五才の若さだった。

六年間で非常な数の挿絵を描いた。彼は色々な芸術家と様式から靈感を得た。例えば希臘の陶器類とエドワード・バーン・ジョーンズの挿絵。しかし、特に日本の美術から影響を受けた。

19世紀半ば、鎖国中の幕末の日本に押し寄せた開港の波によって、欧米に日本文化が紹介されると、特にパリをはじめとしてヨーロッパ全土に日本美術のブームが巻き起こり、以降の西洋美術の動向にも、多大な影響を与えた。

この現象はジャポニスムまたは「日本趣味」と呼ばれている。ビアズリーは浮世絵にとっても興味があった。他のジャポニスト達のように浮世絵を持っていたが、特に彼の家には春画の収集があった。

浮世絵を見つけてから、彼の描き方は全く変わった。

ビアズリーの新しい様式は菱川師宣や葛飾北斎などの画風にすごく似ていた。ビアズリーは題材や技法などを浮世絵から表面的に模写したというのではなく、浮世絵の基礎的な原理を深く理解することができた。

彼は浮世絵の特質、例えば簡単な線や不均衡や縁の取り方を学んだ。そして、個性的な解釈によって描いた。

彼は日本美術の技法を取り入れ、それらを西洋の様式と混ぜた。ビアズリーの作品のなかでもっとも有名といえるのが、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵であろう。

黒と白によって描かれた『サロメ』と菱川師宣の木版画との間には共通点がある。

『サロメ』は社会に登場すると、人々の注目を集めた。見る者に激しい衝撃と嫌悪感を与えた。

それにもかかわらず、ビアズリーの様式はのちの世の芸術家、特に「アール・ヌーボー」の挿絵画家たちに多大な影響を与えた。